

## 詩篇139篇

## 指揮者のために。ダビデの賛歌

## 《全知なる神》

- 1 主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。
- 2 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。
- 3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。
- 4 ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。
- 5 あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。
- 6 そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。

## 《遍在なる神》

- 7 私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましよう。
- 8 たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。
- 9 私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、
- 10 そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます。
- 11 たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。私の回りの光よ。夜となれ」と言っても、
- 12 あなたにとっては、やみも暗くなく夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。

## 《全能なる神》

- 13 それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。
- 14 私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさせて恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。
- 15 私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。
- 16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。
- 17 神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。
- 18 それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。

## 《主を憎む者のための祈り》

- 19 神よ。どうか悪者を殺してください。血を流す者どもよ。私から離れて行け。
- 20 彼らはあなたに悪口を言い、あなたの敵は、みだりに御名を口にします。
- 21 主よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。
- 22 私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。
- 23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。
- 24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

前篇より始まった「ダビデ詩篇」の第二。本篇も「ダビデ」と名前が冠せられてはいるものの、使われている用語から見て書かれた時代はもっと後代のものと思われます。その理由は、ヨブ記に出てくる用語との共通点が多いことです。

例：

「御手を私の上に置かれました」（5節）

「私たちふたりの上に手を置く仲裁者」（ヨブ9:33）

「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです」（13節）

「皮と肉とを私に着せ、骨と筋とで私を編まれたではありませんか」（ヨブ10:11）

「私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに」（16節）

「もし、彼の日数が限られ、その月の数もあなたが決めておられ」（ヨブ14:5）

ヨブ記の内容そのものは族長時代に生きた人を描いていますが、その優れた文学様式からして捕囚後に書かれた書だという見解が有力です。本篇もヨブ記と同時代に書かれた可能性があります。

#### 《全知なる神》 1～6節

詩人は神と自分との関係において、神が自分の行動も（**すわるのも、立つのも**）、考えることも（**思い**）、語ることも（**ことば**）、すべてをご存知であることを告白します。しかも、「**ことばが私の舌にのぼる前に**」（4節）と言われるように、彼の動機となっているそもそもの彼の性質が知られているというのです。

近年、ITの発達により、私たちの趣向に合ったものがウェブページに広告として出てくることを経験している人が多いでしょう。スマートフォンの普及に伴い、我々が閲覧したもの、喋っている内容などを機械が読み取り、記憶し、それに合ったものを次々と提供してくるのです。このように企業によってビッグデータが収集されていることは気持ち悪くもありますが、それ以前の問題として、神は更に深い私たちの思いを知っておられます。この先、私たちが何を語り何を行なうかも神はすべてをご存知であり、何者も神から隠れることはできないのです。

#### 《遍在なる神》 7～12節

神の目を避けて逃げ隠れしようとしても、それは徒労に終わります。詩人はこのことを様々な角度から表現しています。「**たとい、私が天に上っても**」「**私がよみに床を設けても**」（8節）、「**海の果てに住んでも**」（9節）、「**やみよ。私をおおえ**」（11節）と言って闇に紛れようとしても、私たちの行く所どこにあっても神は先回りして待っておられるでしょう。このことを私たちはどう捉えるか。常に神に監視されていると厭がるか、それとも如何なるときも見守ってくださっていると感謝するか、神がその人にとってどういう存在であるかによって私たちの反応は違ってきます。隠れても無駄であるならば、すべて正直に告白すればよい。そのような風通しの良い関係こそ求められているのではないのでしょうか。

## 《全能なる神》13～18節

詩人は、自分という存在そのものが神によって造られたことを理解していました。「**内臓**」(13節)も「**骨組み**」(15節)も、更に細胞の一つひとつを造り給うた神。その神が私たちにどうい  
う人生を歩ませようとしておられるか、ご計画までもが置かれている。「**あなたの書物にすべてが、  
書きしるされました**」(16節)という表現は、まことに私という存在が「神の書」に傑作として記録  
されていることを思わせます。

マックス・ルケード著『たいせつなきみ』という絵本では、主人公の木の人形であるパンチネ  
ロがへまをするたびに「**ダメシール**」を体に貼り付けられていきます。ウィミック村では、何か  
賞賛されるようなことをすると「**星シール**」が貼られていくのです。パンチネロの全身にはダメ  
シールが貼られ、嘲笑の的となっていました。ところが、そこに一人、何も体に付いていない少  
女が登場します。彼女にはシールを貼ろうとしてもくっつくことすらできないのです。パンチネ  
ロは彼女がどうして他の人形とは違うのか知りたくて、彼女に問いました。すると、彼女は「**エ  
リ**」を紹介してくれたのです。エリとは、人形たちを作ってくれた人で、一人ひとりを「**傑作**」  
として見ていました。パンチネロはエリの許に通い続けることによって、一つひとつ人形たちに  
よって貼り付けられた「**ダメシール**」が剥がれ始めます。

「**私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます**」(18節)という表現は、インマヌエルな  
る神がいつも私たちと共におられることを表しているでしょう。

## 《主を憎む者のための祈り》19～24節

19節以下では急に調子が変わり、神に敵対する者への怒りのことばで満ちます。敵対者のこと  
が「**悪者**」「**血を流す者**」「**敵**」「**あなたを憎む者たち**」「**あなたに立ち向かう者**」と様々に言い換え  
られています。その敵対者が詩人に対して何をしたのかは具体的に書かれていませんが、彼が信  
じる方を嘲笑していたのでしょう。自分が心で大切にしているものを侮辱されることは誰にとっ  
ても耐え難いことです。殊に、詩人にとって神は人格的な交わりのうちにある方でしたから、そ  
の関係が馬鹿にされることはあってはならないことでした。「**私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎  
みます**」(22節)という表現は過激ですが、読者はその裏の意味を読み取るべきでしょう。それ  
ほどに私は神を愛していると言っているのです。私たちにとって大切な身内を馬鹿にする者があ  
ったら、彼のような思いで身内を守るのではないのでしょうか。嘲笑を認めるなら、それは自分自  
身をも欺いていることになるでしょう。神を擁護するということは、信じる者にとって自分を大  
切にすることでもあるのです。

この詩人の激しい祈りは、前半部で語られてきた、神が自分をどこまでも深く知っておられる  
ところに動機づけられています。私たちもそれほど深い神との交わりのうちを生きるものであ  
りたいと思います。